

ある挑み—自然消滅—

奥村 一郎

だいぶ前のことだが、朝日新聞にのせられた、ナショナル・松下電器産業株式会社の創始者・故松下幸之助氏のつぎのような文章があった。《寿命を知る》という題であった。

「過日、京都の真々庵で、あるお坊さんと歓談のひとつきを過ごした。そこでいろいろと話をかわしたのだが、その話のなかで、フト私はこの坊さんに、禅宗の今後はいったいどうなっていくのか、ということをたずねてみたのであった。

禅宗だけに限らず、わが国の仏教というものは、現在、必ずしも興隆しているとはいえないように思う。最近欧米諸国で、内容はともかく、禅ということばに興味が持たれるようになったとはいうものの、全体の趨勢としては、ますます盛んであるとは決して言えないように思うのである。

そこで私は、禅宗のお坊さん自らが、これをどう考えておられるのか、なにげなしにおたずねしてみたのであった。

答はまことに簡単であった。

『禅宗は自然消滅でしょうナ』

正直なところ、私はおどろいた。ともかく、このお坊さんは高僧といわれるほどの偉い方なのだが、そのお坊さんが、自らここまで言い切られるとは、私は考えてもみなかったのである。

一応、ここで文を切ってみよう。

「禅宗は自然消滅でしょうナ」……。

いやしくも自ら信奉する宗教について、「自然消滅」と言い切ってしまうことには、さすがの松下氏も、度胆を抜かれたにちがいない。

そこでそのあとに松下氏は、禅僧の説明と自分なりの理解を書き留めている。

「私のおどろきを察しられたのか、その人は静かにことばを足された。『松下さん、それは寿命ですよ。諸行無常を説かれた釈迦の教えなんですよ』。

私は“なるほど”と思った。いっさいのものが生々流転し、いっさいのものに寿命がある。大きな目で見れば、そこに真の生成発展の姿があるわけである。だから禅宗といえどもその例外ではない。万物流転の法則に従って、やがては寿命がつきてゆくのである。お



奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年生まれ。東京大学法学部政治学科卒業。48年、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会・カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書に、『断想』『主とともに』『友の祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンズ宗教研究所）など多数。

迦さんが仏教のなかで自らそうお教えになっている。

——なるほど言われてみれば、まったくそのとおりではないか。

しかもこのお坊さんご自身は、自分の信奉する禅宗が、やがては自然消滅するからといって、けっして悲観しておられるわけではない。むしろそれを動かしがたい一つの哲理として承認されたうえで、何ものにもとらわれることなく、禅宗の寿命のつきるその瞬間まで禅の教えを説いてゆこう、と考えておられるように思う。そして、そこにいわば非常な安心の境地を得ておられる、ということなのであろう。

私はこれを聞いて非常に啓発されたのであった。結局われわれ人間の寿命も、また仕事や事業も、これと同じことがいえるのではないかと思う」。

わたしは、この小文を目にしたとき、ほとんど反射的に、自分自身にあてはめて考えてみようとした。

もし仮に、わたしがあのような質問をうけたとしたら、どう答えていたであろうかということである。

戦後十年たらずで、今日に至るまで頭打ちになっている、日本におけるキリスト教のまことに遅々たる歩みなどを考えて、「キリスト教の今後の見通しは……」と人に尋ねられた場合、はたして「キリスト教は自然消滅でしょうナ」と答え得たであろうかということである。

おそらく、否。いや確かに否である。

「キリスト教は永遠、絶対であり、他宗教はなくなっても、キリスト教は世の終わりまでつづく」というようなことを力説したことであろう。これは、わたしだけではあるまい。少なくとも、キリスト教徒をもって自認しているものなら、よし、司祭や、修道者、牧師

でなくとも、同様のことを断言するにちがいない。もし「キリスト教は自然消滅でしょうナ」などと言おうものなら、たちまち、不信の徒として四方八方からきびしく糾弾されることは明らかである。

ということは、キリスト教徒であるわたしとの対談であったなら、松下氏は決してあのように啓発されることはなかったであろうということにもなる。と考えると、禅仏教のもつ体質と、キリスト教のそれとは、どうしても異質性があるといわなくてはならない。いっそのこと、松下氏をおどろかし、啓発するために、あの禅僧をまねて、「キリスト教は自然消滅でしょうナ」と悟り顔でいおうものなら相手の心理効果を狙う自己欺瞞となることも必定。つまり、キリスト教徒の口からは、あのような禅僧のことばは、どうしても出ようがないということである。一体、これは何を意味しているのだろうか。ことばは、何でもないひと言、「自然消滅」というだけのことである。しかし、そのことを言い得るか否かは、きわめて深い宗教の本質的問題がひそんでいる。

もし、キリスト者が、そのような心境に到達することができないというのなら、その理由はどこにあるのだろうか。キリストの永遠性に基づくキリスト教とその教会の不朽性を認め、かつ信じることは真理に対する誠実さであって、それを否定することは、偽りの謙遜であると主張すること自体が、われわれキリスト者自身の宗我や我執からの脱出を阻んでいるということになるのであろうか。

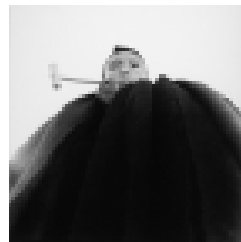
謙虚と真理とは切り離せないと同時に、双方ともに、自我からの解放をもたらすという大原則がここでも再確認されなければならない。謙遜は自分を守るのではなく、真理を守るために自我を捨てることを知っているからである。

キリストの偉大さ故に、キリスト者は、深層の至純な脱自我の境地に達し得ない背理がそこにあるというのは、いったいどういうことなのであろうか。

キリスト教的霊性に対する、禅のみごとな挑みが、そこにあるとするならば、数千年の伝統に生きる、深い東洋の霊性を前にして、いまキリスト教は、大いなる世紀の課題に直面しているといわなくてはなるまい。

《付記》本誌 "Vitalité" に前号まで執筆してこられた秋月龍珉老師

とは「禅とキリスト教」のさまざまな会合でお目にかかり昵懇にさせていただいていた。ご老師は青年時代に、キリスト教から禅仏教に変わられたと聞いている。小生は逆に東大在学中、禅仏教からキリスト教に転向した。仏縁というのか神の摂理というのか、長い仏教の伝統が今なお生きている日本ならではの奇遇の場を本誌において与えられたことに心から感謝したい。



■ フォト・ギャラリー・インターナショナル

Lin Tian Fu 林添福

"Images of Frontier, China"

台湾の写真家による中国少数民族のドキュメント

7.3 (Wed.) ~ 8.16 (Fri.), 1996

東京都港区虎ノ門 2-5-18 〒105 TEL. 03 3501 9123
月～金 11:00-19:00 土・日・祝日 休館

■ P.G.I 芝浦

目羅勝 Masaru Mera

"アメリカ"

ライフワークとしての「心のアメリカ」の風景

7.9 (Tue.) ~ 8.10 (Sat.), 1996

東京都港区芝浦 4-12-32 〒108 TEL. 03 3455 7827
月～土 11:00-18:00 第2・第4土・日・祝日 休館

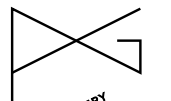


PHOTO GALLERY
INTERNATIONAL